プラスチック博物館訪問記

佐藤　功
Satou Isao

1．訪問まで

この話のきっかけは3年前までさかのぼる。その年，私は団体ツアーにもぐりこみ，NPE'97を見学した。異国の技術を見るのは楽しく，それなりの成果をあげることができた。そのなかで，あめ色に変色した手鏡とその金型が展示されているのを見た。それがアメリカプラスチック博物館との出会いである。最新の技術を競う展示会のなかで古いものに出会うことは珍しく，大変印象深かった。

帰国してからもこのことが忘れられず，一度たずねてみたいと思うようになり，少しずつ調べ始めた。所在がわかり，該当する地図も手に入れ，ボストン郊外のレオミンスター(Leominster）という町にあることがわかった。しかし，それ以上の情報はなかなか手に入らなかった。

今回，NPE2000を見学する機会に訪問することを思い立った。問題はアクセスだ。ボストンからどうやって行ったらよいか皆目わからない。博物館の案内には「ボストンから高速道路を1時間走ればよい。わかりやすい」とある。しかし，日本でも運転が危なっかしい私が，左ハンドルで高速を走れるはずがない。問い合わせのメールを出しても返事がこない。後でわかったことだが，まさかこんな問い合わせが日本から本当にあるとは思わなかったらしい。

いろんな人に聞いてみたが，レンタカーを勧める人が多い。これがアメリカの常識のようだ。そのうち，アムトラック（鉄道）で行けるかもしれないと教えてくれる人がいた。これも調べてみたが，なさそうだった。そのうち，バスがあるかもしれないという情報が入った。アメリカにはグレーハウンドという長距離バス会社がある。

早速インターネットで調べてみると，ボストンからレオミンスターまで1日2便出ていることがわかった。下り便の1便はボストンを夕方出て，翌朝着くことになっている。これだと都合がよい。長距離バスは治安が良くないと聞いている。日本でも事件が起きた後だ。まして，夜行便だ。怖いが，やむをえない。一時はこれで行く決心をした。当時はいろんな手段を使って，レオミンスターを調べていたので，そのうち，この町のホテルのFax.番号が手に入った。ここで1泊すれば夜行に乗らなくても済む。スケジュールを組替えてみると，ボストンの乗換え時間がぎりぎりだが，何とかいけそうなことがわかった。早速ホテルの予約とスケジュールの変更を行った。OKが出たのは日本出発直前だった。

NPEを早めに切り上げ，ボストンに向かう。

ボストンには30分遅れで到着。バスの時間が気になる。あせってタクシーに乗り，バスターミナルへ向かう。切符売り場でレオミンスターというが，そんな町はないという。発音が悪いのだと思い，インターネット検索のアウトプットを見せ，やっと納得させた。直行便でなく，乗り換えがあることがわかった。これで便ごとに所要時間の違う謎も解けた。経由地が違うし，待ち時間も違うのだ。このために，2時間で行く便もあれば4時間かかる便も出るわけだ。夜行便だと思っていたのは,途中の町についた後，翌朝まで便がないということだったのだ。

出発5分前，かろうじてバスの人になれた。車内は見回したかぎり，怖い雰囲気はない。郊外に出るとハイウエーは快適だ。森の中を一路西に進む。これが本当のアメリカの景色かも知れない。途中の町で乗り換え。待ち時間が2時間近くあり，付近を歩き回り，田舎町を満喫する。石造りのタウンホール，緑濃い公園，公園横のアウトレットショッピングセンターものぞく。シカゴでカタログ類をたくさんもらっている。これ以上荷物は増やせないので何も買えない。

バスを乗り換え，目的地のレオミンスターに到着。ガソリンスタンド（**写真1**）の横で下ろされる。タクシーを探すが見つからない。電話はあるが，番号がわからない。途方に暮れたが，

写真1　レオミンスター（Leominster）のバス停

落ち着いて周りを見ると我がホテルは目の前にあった。パンフレットどおりのきれいなホテルだった。予約も入っており，無事チェックイン。当地はりんごの産地だそうで夕食はりんごと鶏を煮た料理だった。長い長いレオミンスターへの道のりだった。

2．博物館へ

翌日は快晴。初夏の陽射しが強い。ホテルに荷物を預け，フロントで書いてくれた道順に従って歩き出す。美しい住宅街，古い町並み，緑の公園，（**写真2～6**）それにショッピングセンターとアメリカ内陸の景色を満喫する。途中で2度ほど道を聞いたが予想どおり，ほぼ1時間で行き着くことができた。

博物館はレンガづくりの立派な建物(**写真7**，タイトル写真）だが規模は小さい。入り口では，おばさんが受け付けとミュージアムショップの店番でがんばっている。来意を告げると，館長のロワー氏が現れる（**写真8**）。彼とはシカゴでお会いしている。再会を喜ぶ。

入ったところが医療とプラスチックの展示室になっている。ガラスと金属の医療機器がプラスチック化されて，いかに便利になったかをう

写真2　鉄道跡（もう鉄道では行けない）

まく展示している。当地はエーテル麻酔発祥の地だそうで，それにかかわる展示もある。ところが充実しているのはここまで。あとはセルロイド時代の製品のコレクション（**写真9，10**）。最も古いプラスチック成形品といわれている玉

写真3　飛行場（自家用機なら行ける）

写真4　博物館近くの住宅地

写真5　レオミンスターの中心街

写真6　中央公園

写真7　博物館入口

写真8　館長，ロワー氏

突きの玉の金型がガラス製だったことを知り，感動する（**写真11**）。

古い成形機も十数点（**写真12，13**）集められていた。新しいものでは，自動車のプラスチック部品が比較的良く集めてあった。

この博物館はまったく独立機関なので，寄付を集めながら少しずつ展示を充実させているのだそうだ。個人的には功労者顕彰の展示が面白かった（**写真14～18**）。実用化技術重視の姿勢が貫かれている。このためノーベル賞学者フローリーの上に着色技術者が乗っている。ナイロンのカローザスには生産技術者のショットが並んでいる。ダウ氏も発泡スチロール技術者グレープと並列だ。

この博物館のもうひとつの特徴は児童教育に力をいれている点であろう。化学的な面からプラスチックを理解させる実験室（**写真19**）と成形を見せる部屋（**写真20**）がある。このほかレゴのようなプラスチック玩具を置いた「創

写真9　セルロイドの櫛

写真10　セルロイド玩具

写真11　玉突きボール用金型（ガラス製）

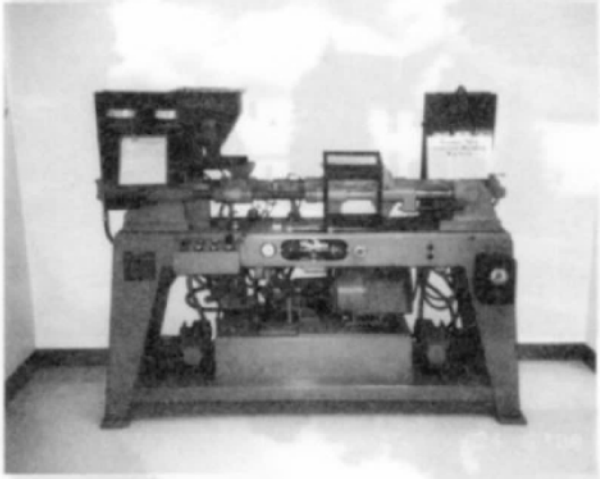

写真12　コレクションの古い横型成形機

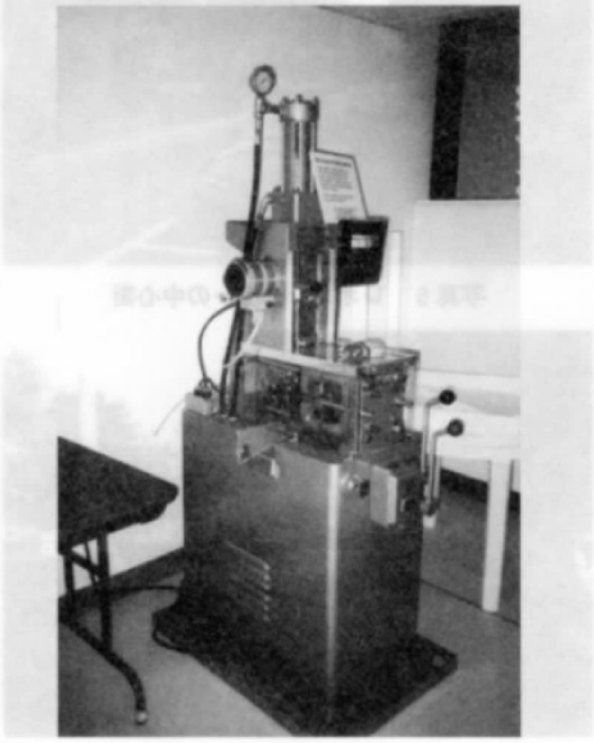

写真13　同縦型成形機

造の部屋」というプレイルームもあった。

大人用には屋根裏に図書館がある。暖炉やソファーが置いてあり,図書館というより書斎だ。家具は全部オークだとロワー氏が自慢する。こんなところで1日過ごせたら楽しいと思う。

この建物は廃校跡だそうだ。子供が投石でガラスを割るため,下層の階は窓をつぶしてある。

写真14　顕彰パネル（1）ノーベル賞化学者フローリーの上に着色屋のオヤジが乗っている

写真15　顕彰パネル（2）ナイロンはカローザスだけの功績ではない

ちょっと残念だ。

ロワー氏の興味はほとんどセルロイド時代にある。館長室に案内され，秘蔵のコレクションを見せていただく。彼が読めない日本語の翻訳を少し手伝う。日本の状況についての調査依頼も引き受けてしまった。

ショップでおみやげを買い，館長の見送りを

写真16　顕彰パネル（3）成形機，成形業のパイオニアも紹介

写真17　顕彰パネル（4）ダウの創業者と発泡カップの発明者

写真18　顕彰パネル（5）ジャーナリズムの重要性も認識（モダンとワールドの創業者）

受け，博物館を後にした。

3．訪問の後で

楽しい出会いであった。ロワー氏のような老後があることを知っただけでも収穫だ。彼の「歴史を残したい，次世代を育てたい」という情熱には頭が下がる。彼の興味がセルロイド時代にあるのはわかるような気がする。アメリカが日本に生産技術でキャッチアップされてから久しい。アメリカ主導でプラスチック時代を構築した時期はそんなに長くは続かなかった。

小型乗用車，ビデオ，カメラあたりからプラスチック製品の開発の中心は日本に移ってしまった。ひょっとするとフィリップス（オランダ）がテープカセットを開発したのが転換点だったかもしれない。生活全体のなかでのプラスチックを展示しようとすると，アメリカ中心とはいかなくなる。インターナショナルな発想をしないとほかの分野ではコンセプトが構築できない。このあたりが本博物館の課題であろう。

写真19　実験教室（奥に風力発電用のフィンが見える）

写真20　成形実験室

ひるがえって，わが国を見ると，どうであろう。AV，OA，小型乗用車で主導権を握った日本は，これらの製品にかかわるプラスチック部品の開発の主役を演じてきた。われわれの貢献は決して小さくない。しかし，これらの成果はきちっと保存，記録されているだろうか。部分的には個別の企業などで保存されていることは承知しているが，努力には限界があり，散逸が心配だ。わが国のプラスチック時代も半世紀を過ぎようとしている。世代交代が進むなかで，残された時間はそんなにない。

（佐藤功技術士事務所）

佐藤功　略歴

1942 年愛知県生まれ、1964 年　信州大学繊維学部卒業、1964 年旭化ベンベルグ工場にて新紡糸機開発などを担当、1969 年旭化成にてプラスチック新規用途開発、加工技術開発などに従事、1996 年～㈱消費経済研究所にて家庭用品の開発、品質管理を担当、1998 年技術コンサルタントとして各社技術指導、技術開発に参画。

・その間 2000 年～2011 年放送大学非常勤講師、

・技術士（化学部門）、

プラスチック成形加工学会新加工技術研究会委員、

神奈川県おもしろ実験科学工作指導者

さいわい歴史の会会員、

川崎市立古川小学校理科実験支援員

・主な著書

一歩進んだ射出成形技術（プラスチックスエージ）

新装版はじめてのプラスチック（森北出版）

プラスチックのいろは（日本工業出版）

図解雑学プラスチック（ナツメ社）

・URL：http://park11.wakwak.com/~itt/